

ベケット・ライブ vol.6『クァクァ』

05年2月2日(水) - 6日(日) * 2月1日(火)プレビュー

「劇」小劇場

企画製作:(有)スリーポイント(代表:鈴木理江子)

〒176-0012 東京都練馬区豊玉北 5-26-12

Tel 03-6761-3700 Fax 03-3991-8060

080-5696-0033(ベケット・ライブ専用)

info.3points@apost.plala.or.jp

<http://www6.plala.or.jp/beckettlive/>

ベケット・ライブ vol.6『クァクァ』

原作:サミュエル・ベケット 演出:阿部 初美 ドラマトゥルク:長島 確

出演:鈴木 理江子 井出 みな子

期間:05年2月2日(水)~6日(日)*2月1日(火)プレビュー

	2/1(火)	2/2(水)	2/3(木)	2/4(金)	2/5(土)	2/6(日)
15:00						
19:30						

会場:「劇」小劇場 席種:全席自由

料金: 一般/前売¥3,000 当日¥3,300 学生/前売¥2,500 当日¥2,800(要学生証)

2月1日(火)プレビュー ¥1,500

予約・問合せ:スリーポイント 080-5696-0033(ベケット・ライブ専用)

作品概要

ベケット・ライブ vol.1 および vol.2 で取り組んだ作品『テキスト・フォア・ナッシング』のおよそ10年後に書かれた、ベケット最後の長編小説『事の次第』。袋一つを持ち泥の海を這い進む主人公がピムと呼ばれる何者かと出会い、別れるまでの<事の次第>が、「ピム以前」「ピムと一緒」「ピム以後」の三部構成で語られる。真剣ゆえにそこはかとなく滑稽なやりとり、そこにときおり差し挟まれる美しい過去のイメージ。それらを描き出すテキストは、いっさいの句読点のない独特の文体で書かれているが、これは単なる紙の上の実験ではなく、むしろこの作品に至る10年のあいだにベケットが踏み出した、戯曲やラジオ作品における声や息の領域の探索に深く根ざしたものだといえる。いわば身体へと宛てられた、この特異なテキストに秘められた可能性を、新訳・翻案により、二人の俳優の身体と声をとおして舞台化する。

ベケット・ライブ

『ゴドーを待ちながら』で有名なサミュエル・ベケットですが、後期の作品はあまり知られていません。難解とされ、実験的な要素も強いため上演される機会も少ないのかもしれませんが。しかし特異な光りを放つ後期の作品には黙読しただけではわかりにくい、上演を前提としたベケットの計算が書き込まれており、観るものに多彩な想像をもたらします。

「ベケット・ライブ」はかつてパリのルコック演劇学校に学び、その後転形劇場で活躍した鈴木理江子を中心に、稽古に携わりながら翻訳のあり方を模索するベケット研究者長島確、近年さまざまな実験的な舞台を手がける円の演出家阿部初美がベケットの後期作品に取り組んでいるシリーズ企画です。

この企画は1999年、ナディッフ・ギャラリーで始まりました。きっかけは、ベケットとベケットと親交の深かった画家ブラン・ヴァン・ヴェルデの共同作品『Texte pour rien 13 (反古草紙-13)』でした。同名のベケットのテキスト1篇と、ヴァン・ヴェルデのリトグラフ5枚からなる大きな挿画本ですが、ギャラリーにこのリトグラフを展示し、鈴木理江子がベケットのテキストを朗読するというものでした。翌年再演。そして『vol.3』から長島確・阿部初美、『vol.5』から井出みな子が加わりました。

ベケット・ライブ 上演記録

Vol.5『あしおと』

04.3月24-28日 「劇」小劇場

演出:阿部初美 翻訳:長島確 出演:鈴木理江子 井出みな子

一筋の明かりの中を繰り返し「歩む女」と闇から聞こえる「声」。2人の対話もそれぞれが語る物語も、足音のリズムに寄り添いながら進行する。ベケットが「ペインティング・プレイ」(歩く劇)と呼んだ静かな緊張感に満ちた作品。



©宮内勝

Vol.4『ロッカバイ』

03.3月19-24日 plan B

演出:阿部初美 翻訳:長島確 出演:鈴木理江子

揺り椅子に座った一人の老女。声が聞こえ椅子が揺れる。その声に唱和する老女。子守唄かもしれない声はやがてやみ、椅子も止まる。「老女」と「声」と「椅子」のセッションとも言える、ベケットの晩年に輝く作品。



©宮内勝

Vol.3『わたしじゃない』

02.3月20-24日 アトリエMODE(現、アトリエ春風舎)

演出:阿部初美 翻訳:長島確 出演:鈴木理江子

「口を舞台にのせられるだろうか？顔の部分は隠し、しゃべり続ける口だけを」。ベケットのこの驚くべき着想によって生まれた、暗闇に浮かんだ口が機関銃のようにしゃべり続けるという度肝を抜かれるような作品。



©宮内勝

Vol.2『テキスト・フォア・ナッシング 13』

00.6月2-4日 ナディッフ・ギャラリー

演出:藤田康城 翻訳:鈴木理江子(協力:吉田加南子) 出演:鈴木理江子

『反古草子 13』の再演。ベケットが真の朋友である画家ブラン・ヴァン・ヴェルデに宛てた『テキスト・フォア・ナッシング 13』。「声」と「わたし」をめぐる存在論的でスリリングなテキストを、かすかな気配として身体化する。



Vol.1『反古草子 13』

1999.5月21-23日 ナディッフ・ギャラリー

演出・出演:鈴木理江子 翻訳:片山昇

ベケットと画家ブラン・ヴァン・ヴェルデが共同で製作したリトグラフ5枚組の挿画本『反古草子 13』。ギャラリーにこのリトグラフを展示し、ベケットの同名のテキストを肉声化する試み。



プロフィール

鈴木理江子(すずき りえこ)俳優



1948年生まれ。70-72年、ジャック・ルコック演劇学校(パリ)に在籍。打楽器奏者トム・ヤマシタらとパリでの活動を経て、74-88年劇団転形劇場(太田省吾主宰)に在籍し、中心的女優として『水の駅』など多数の舞台に出演。88年以降も太田省吾の演出作品や海外のプロジェクトに多数出演。また、松本修、平田オリザなどの演出作品にも客演。99年より、スリーポイントを主宰し『ベケット・ライブ』を開始。『vol.3 わたしじゃない』『vol.4 ロッカバイ』『vol.5 あしおと』で多くの反響を得る。最近ではほかに『現代能 ベルナルダ・アルバの家』(岡本章演出)、『ヤジルシー誘われて』(太田省吾演出)。また、美術展『プラン・ヴァン・ヴェルデ展』(東京:草月美術館)を企画・開催。訳書に『ベケットとヴァン・ヴェルデ』(みすず書房:共訳)。立教大学文学部比較文芸思想コース兼任講師。

井出みな子(いで みなこ)俳優



1942年、東京生まれ。演劇集団「円」に所属。7歳より子役として文学座で活躍。初舞台は49年、『わが心高原に』(加藤道夫演出)。80年、木山事務所に所属し、『ドラキュラ伯爵の秋』『霧田気のある死体』など別役実作品に多数出演。円では、つかこうへい作『今日子』、別役実作『雨月物語』『わが師・わが街』、太田省吾作『木を揺らす』など、現代を代表する劇作家の作品に出演。他に、別役実『メリーさんの羊』、イヨネスコ作『椅子』、チャーホフ作『ワーニャ伯父さん』(ルドルフ・ジョーオ演出)などに客演、積極的に幅広い活動を行なう。97年、文化庁在外研修生としてイギリス「RADA」(王立演劇アカデミー)に派遣。最近では『花粉熱』(ニコラス・バーター演出)、『ベケット・ライブ vol.5 あしおと』。常に前向きに挑戦しつづける俳優である。

阿部初美(あべ はつみ)演出家

1970年生まれ。演劇集団「円」演出部に所属。演出助手として、円の公演、また太田省吾演出作品に多数参加。演出作品には、円小劇場の会『抱擁ワルツ』(太田省吾作)、藤沢市湘南台市民シアタープロジェクト『昼の月、短い夢』(川上弘美原作)、世田谷パブリックシアター・ドラマリーディング『4時48分 サイコシス』(サラ・ケイン作)、仙台演劇祭2002『夜交花』。

『ベケット・ライブ』では『vol.3 わたしじゃない』『vol.4 ロッカバイ』『vol.5 あしおと』。実験的作品をてがける若手演出家として注目される。ベルリン演劇祭2003、若手演劇人のための国際フォーラムに招かれる。

長島確(ながしま かく)ドラマトウルク

1969年生まれ。立教大学文学部フランス文学科卒業。早稲田大学演劇博物館COE客員研究助手。若手ベケット研究家として注目される。翻訳に、ベケット『いざ最悪の方へ』(書肆山田)『あしおと』『ロッカバイ』(「るしおる」43号)『わたしじゃない』(同46号)、フィリップ・ミンヤナ『アンヌ・マリ』(共訳・上演台本)、スルジット・パーター『キッチン・カタ』(「舞台芸術」01号)など。また、舞台字幕に、『ハムレットの悲劇』(ピーター・ブルック演出)、『月の向こう側』(ロベール・ルパージュ演出)など。稽古に携わりながら翻訳のあり方を模索する、新しいタイプの研究家である。